
弱い男

コーキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱い男

【著者名】

コーキ

N5625F

【あらすじ】

弱い男は弱いことを自覚しているから、強くなりたかった。その思いが通じたのかどうなのか、ある日強いと思える男に出逢い、その弟子になる。

そう、彼は弱かった。

弱いというのは、いわゆる体が弱いすなわち、ひ弱といつ生來の
肉体的弱さではない。

彼は弱かった。

弱いというのは、いわゆるおつむが弱いすなわち、バカといつ生
來の知能的弱さではない。

彼は弱かった。

簡単にかつ乱暴な言い方をしてしまえば「ケンカが弱い」とかそ
う言つ世の中の順列的な地位の低さ、という意味の弱さであり、そ
の地位は仲間内では最下層に属していて、普段から意に反してパシ
リの役割を押しつけられている。それがいやで反抗することもある
のだが、あつと言つ間に暴力でねじ伏せられてしまつて更に地位は
低下する。

人生にそんな悪循環を引き起こしてしまつほどに彼は弱かった。

「ちくしょう、強くなりてえなあ」

なんて、なんの努力もしないで石ころを蹴りながらとぼとぼ歩い
ているから弱いままなのだし、そんな簡単なことにさえ気付かない
ところがまた弱さの根拠となつていて。しかし、ここだけの話、彼
は気付いているのだ。自分の弱さがどこに起因しているのか。

「強くなろうとしてないから」

「そら、強くなるはずもない」

と、ひとりで問答できるほどにわかっている。

だからほんのささやかな努力として、インターネットで「世界の
武術」という実に大雑把な検索をかけ、ほじくり返してはそこに掲
載されている写真を参考に、まず形をキメてみる。

3畳ほどの狭い自室でモニターに写る空手家の写真を真似ながら
くねくねとみをよじらせてみたが、ちょっと大きく動くと壁に手足

がぶつかつてしまつ狭い部屋が憎らしく思え、自分にこんな狭い部屋しか「えられない甲斐性なしの父母を憎悪し、この際だからこうして体得した空手の技術でまず」この父母を血祭りに上げてやろうかと妄想して、ひひひと笑つたけれど今ひとつ笑いに迫力が欠けて情けない。こんな卑屈な笑いをしているようではとてもとも「自分は強い男である」と胸を張ることはできないと思つ。ではこの卑屈さの原因は何かといえばこれはもう、この狭い部屋に違いない。部屋が狭くて思う存分に動けないから精神まで卑屈になるのだと彼は結論を出し、ひとまずは部屋を出る。

そして、これもまあそれほど広くはない玄関ホールに立つてみると、おあつらえ向きに姿見が置いてある。

先ほどモニターに映つていた画像を思い浮かべつつ、姿見の自分にそのポーズを真似させてみる。

「暗黒舞踏」

いつからそこにいたのか、背後に母親が立つていて、彼を指差しながらきつぱりとそう言つて放つた。

姿見に映る自分と母親の姿をみつめ、内心ムカつきながらも弱い彼はにつこりと母親に笑顔を向ける。

そして絶望に身をこごめながら自室に戻り、古くさい蛍光灯のヒモを引っ張つて室内を闇で暖め、さらに真綿の重い布団を唇付近まで引き上げて「寒いナア」と呟いたかと思うと、すぐさま眠りに落ちてしまった。

家の中も外も寒々しい師走の夜。

(つづく)

今日も今日とて弱い男は朝から母のいう暗黒舞踏、自称空手を玄関でひとしきり舞い、白目を剥いてぼうっと玄関に立ちつくしている母親の手から風呂敷に包まれた弁当をむしり取り様「いくつからよ、ばばあ」と、せめて家族の前では強がってみせるという寂しい行為をして、家を出た。こういう侘びしい行為を俗に我が国では「内弁慶」なんて言つて戒める。のだが。

「ちきしょー、俺は内弁慶にすらなれないのかー！！」

5秒後、弱い男はそう絶叫しながら田舎町のあぜ道を疾走していった。

背後からは白目を剥き、涎を垂れ流した母親が国体選手並みの素晴らしいフォームで全力疾走し、追いかけてくる。ハハ、そらそうだ、実はこの母親、学生時代は短距離を走っていた国体選手である。そんなちゃんとした訓練を受けた経験を持つ母親が本気で追いかけて來るのだから、「ネットでひろつた空手家の写真の真似をしてでもそれは空手と言うよりも暗黒舞踏に見えてしまう」なんて情けない男が逃げ切れるわけもなく、直に当然とつ捕まつて路上にボコボコにされ、通勤途上の人々が多数往来する中、延びてしまった。瞼は腫れ上がり、唇の端が切れ、鼻血がたれている。

そんな体裁でしかも遅刻である。

上司としては、ノロノロ出勤してきた男を見た瞬間に怒り、そしてその風体を確認して驚愕し、自分のデスクに向かつて歩いてくるのを見て恐怖し、「すんませんでした」と頭を下げる情けなさに涙ぐんで、最終的には心配になつた。

「どしたの、キミは？」

内心では「お前のせいで朝から血圧が上がつたり下がつたりして寿命が縮むわい」と思いつつもそんな風に声をかけずにいられない。

「あ、まあ、事故、ですかね。大丈夫ですから」

内心では「嘘つてわけでもないし」と抗弁しつつもしかし「母親にボコられたのは事故か?」という疑念もあって、そうなると上司に嘘の報告をしたことになるからちょっと後ろめたもあるんだけど、でもそのまま報告したら自分の印象は更に悪くなつて、昇級昇格査定等々に大きく影響を与えそうで嫌だったからとりあえずこの場を立ち去つてごまかしてしまおうとして、しかし弱い男は精神的にも脆いのでそんな僅かなストレスにも耐えきれずその場で失神してしまつた。結局職場は混乱し、男は大迷惑をかけてしまつた。なんとか目がさめてみたらすぐ上司に呼ばれ「今日はもういいから帰りなさい」と言わされたので小さく頷いて帰路についた。

途中、商店街に寄つてネギを買つた。

ネギは体を温めるといつし。

特に体が冷えているという感じはなかつたけれど、温めておきたい気がしたのだ。

ネギを肩に担ぐような格好で歩いていた男の眼が電柱の落書きを捉えた。

”漢”

刷毛で殴り書いたような太い文字であつた。

矢印の方向に眼をやると、道を挟んで反対側の電柱にも似たような落書きがしてある。

男はネギを担いだまま矢印の誘導にしだがつて歩いていった。

どういうわけだか、鼻血が垂れてきて脣、顎、首とつたつて白いワイシャツの襟を汚していたのだが、弱い男は気がつかない様子で、ただようよろと矢印を追いかけて商店街の路地に消えた。

(つづく)

くつせえくつせえ路地の奥深くほほどん詰まりに近いあたり。

弱い男は鼻をつまみながら、風俗営業店が密集して入店している雑居ビルのエレベーター前に佇んでいた。

エレベーター横の案内板にある店はほとんどがまあ、ヘルスなのが、そのなかにひとつだけ、白地に太い毛筆で「漢」と書かれたものがあり、なんだか異彩を放っていた。5階である。

なんとも狭いエレベーター。換気が悪くて、路地の餽えた臭いが充満している。

扉が開く。

「ちーん」

弱い男の眼前2センチほどに向こうに顔面があり、その顔面がいきなりそう言った。

弱い男は驚きのあまり、後方に飛び退いて、でも普通に飛び退けるほど充分なスペースのないせまつくるしいエレベーターなので必然的に飛び退いた先には壁、その壁にどつがんと背中を打ち付けざま、「漢」の店員あるいは主と思わしき怪しい男の全身が見えた。全裸でパイパンスキンヘッド。

あ、やばいな。そう思つたがもう遅い。壁にぶつかつて跳ね返つた弱い男を、その全裸男は真っ正面からガツシと抱きしめ、背中を撫でさすりながら「いらっしゃい」と上目遣いで囁いた。

スキンヘッド男は弱い男よりもすこし小柄で、彼からはつるつるの頭頂部が見え、それは薔薇の香りを漂わせていた。

ぼ。なぜか頬を赤らめてしまつた弱い男は、しかしそうさま我に返り「ひいいい」と悲鳴をあげつつ後ずさつてエレベーターに逆戻り、超高速で「閉」と「1」のボタンを連打した。

扉が閉まっていく。スキンヘッドは動かない。弱い男がホツとした表情を浮かべたその瞬間、スキンヘッドが弾丸のように突き出され

た。

がち。

そんな音をたてて、エレベーターの扉にスキンヘッドが挟まっている。ふつう、安全装置が働いて扉が再び開きそうなものだが、故障しているのか輝く頭部を挟み込んだままびくとも動く気配はなく、弱い男は咄嗟にどうしてよいのかわからずおろおろと狭い空間を動き回っていた。

なんか、ものすごい空気の圧力を感ずる。

なんか、嫌な予感がある。

その場の空気、あるいは気の流れが明らかに変化し、弱い男はおずおずと扉に挟まつたままのスキンヘッドに目を向けた。

ぎし。ぎし。

それはほんのちょっとずつであるが。

ぎし。ぎし。

扉が開いていく。なぜ?

ぎし。ぎし。

やがて、それは弱い男の目にも明らかなほど。

ぎし。ぎし。

スキンヘッドが膨らんで、扉を開いていくのである。

ぎし。ぎし。

スキンヘッドにものすごく太くたくましい血管が浮かび上がつていて、破裂しそうになつている。

ぎし。ぎし。

ホホ、膨れる膨れる、もう肩幅ほどにも拡がつた。

ぎし。

ブワッシャーンー!

と、凄まじい音をたてて扉は跳ね返され、なんというか、縁日に売っているタコバルーンの如く、真っ赤にでかく膨れ上がつたスキンヘッドが、そこあつた。挟まれていた両側頭部には深々とスジが入り、すこし血が滲んでいる。

「だ、だ、だ、だいじょ「づぶでふか？」

弱い男は腰が抜けてしまつて、その場にへたり込みながらスキンヘッドにそんな優しい言葉をかけた。

スキンヘッドはパンパンに膨れ上がつたまま、実に優しく、「いらっしゃい」と言い嬉しそうに笑つた。そして、弱い男の両肩をガツシとつかみ、ずるずると店内に引きずり込んだのである。

背後で、チュン、チュン、チューデーンッ！…という電氣的、また機械的な破碎音が聞こえて弱い男は「ああ、エレベーターが落ちたのだな」と感覚的に悟つたが、そんなことはもう、どうでもよかつた。

頭部を膨らませて、エレベーターの扉をこじ開けたこの男。すこしづつ頭部は縮んでいて、もつほとんどの通常の大きさにむづづつあるこの男。

「強い」

弱い男は引きずられながら、そう思い、その微笑みに憧れ始めていたのである。

(つづく)

「わたくし、仲埜ともうしますじゃ」

「じゃ？」

引きずり込まれた室内、コンクリの床に正座させられ、同じく正座した仲埜とたつたそれだけの会話を交わした後、沈黙はもう小1時間も続いているだろうか。

仲埜は瞬きをしない。

そして、挨拶をした直後から同じ動作をずっと繰り返している。それは、まずにつこりと笑い、細く頬りなげな顎をゆつくりと、30秒ほどもかけて精一杯に突き出し、そして同じくらいの時間をかけて元に戻すという、いろいろするような動作であつて、じつさい弱い男はかなりいらしていた。じりじりしていた。「なんだ、こいつは」と思っていた。

しかしあま、先ほどの頭を膨らませるという変わった技の件もあるし、とりあえず強そうだし、こいつの傍にいれば案外強くなれるのかもしないという田舎から弱い男はこのいろいろする状況を甘受していた。

「眼が乾いてきたので、今日はここまで」

仲埜はそう言つと、もうバチバチと瞬きを始めている。

「え？」

何がなんだかわからない弱い男は、それをボケツとながめていたのだが

「はい」

そう言いながら仲埜が右人差し指で自分の首の左側に触れた瞬間に戦慄し、思わず触れられた部分をカバーしようと、頭を左に傾けたのであつた。

「そこ！だめだめ…………！」

突然である。突然に、空いた右側の首に仲埜の手刀が炸裂し弱い

男は「ぐくつ」と呻いてひっくり返った。

「な、な、な、な、何をするのですか、あなたは？」

と、あまりの驚きに思わず丁寧な言葉で対応してしまった弱い男に
対して、すでに正座にもどつて居る仲楚はとくとくと説明をはじめ
た。

「あのね、首に手刀を喰らった場合、喰らった側に首を曲げてそれをカバーするのはいい。しかし、しかーし、反対側のフォローといふのを忘れると、これは致命傷になるの。がら空きだから。なので、かならず手を当ててカバーする事。いい、やってみるよ?」

に左手をあててカバーして見せた。

「はい、次、あなたやつてみて

なんか、変になよなよした口調がきになつたが、なんとなく仲埜の言ひことも理に適つてこゐるよひな氣がして、とつあえずやつてみる」と云つた。

弱い男は先ほど仲睦かしだと同じ動きをした
「脇が、あま―――い！」

「やめやめ！」
という絶叫と共に、弱い男の左脇腹に仲埜の蹴りが炸裂した。

と啼き、吹つ飛びながら

「なんでや、なんでやー！」

と弱い男はなぜか関西弁で思考していた。

結局、二ノ瀬の屋敷に潜入して、隠し戸を開けたところが、彼の死体が発見されたのである。

(ג'ג')

氣絶中、弱い男の脳では、仲埜に教えられた防御姿勢と、自分がとつた姿勢の違いについて、マルチ画面再生がなされていた。

要するに、仲埜が言つとおり「脇が甘い」のである。

仲埜かとうた姿勢では、首をかバーしている側の腕は閉まつていて、肘でしつかとガードされている。

それは比して自分のところはホーリーは勝が甘々でまあ
ないが、がら空きであった。

したがつて、これはそのがら空き、好きだらけの脇に、当たり前のように蹴りを入れられ、それが見事に決まつてしまつたという、いわば当然の結末であつて、自分はその為に昏倒しているのであると気がついた弱い男は、それに気がついたと同時にもう一つ大きな事実に気がついてしまつた。

暗黒舞蹈。母が彼を指差して吐いたコトバ。

いの脇の甘さ、これが武闘と舞踏の違いである。

の次元で完璧である。

それに対して、自分の防御は、せつかくネットで検索して空手を修得する努力をしていたにも関わらず、脇が甘くて好きだらけと、こう言うことで、なんかひらひらしていて、鬪っているというよりは舞つていて踊つていてダンスしている、そう、彼が苦労して検索した空手という武道は彼の中で昇華されるウチにすっかり落ちぶれ果て、ダンスに変貌していったのである。いや、落ちぶれたからダンスとかそういう事ではなくて、あくまでも落ちぶれているのは弱い男その人であつて、それはダンスをしようとしてダンスをしているアーティスティックな行為とは違う、武道家を志しているうちに知らず知らずダンサーになってしまったという落ちぶれである。

「おまえがわるい

白目を剥いた母親の姿が迫つてくるという幻想にうなされ、弱い男は飛び起きた。

ぬりぬらの脂汗をかきながら上半身を起こすと、眼前に仲埜の顔がまたあって、ヤツは当然のよつに弱い男をだきしめ「お帰りなさい」と艶っぽい声で囁いた。

「気味が悪いな」と、弱い男は内心そう思つていたのだが、そんなことは言わない。仲埜の機嫌を損ねくなかったからである。

なぜ損ねなくなかったか？

ほほほ、弱い男はそのとき、仲埜の弟子になることを決めたからである。

(つづく)

「こちこち

「え

「いちいち、と言っている

「はあ

その日、仲埜に弟子入りした弱い男は、とつあえず防衛の姿勢について教えを請うていたのだが、上記はその際にまず交わされたふたりの会話なのである。

このとおり、完全にすれ違つてしまつていてハッキリ言つて会話になつていない。

「え、ですからね、日常の動作といふものからいちいち慎重に行わねばならないと、こゝう言ふことを言つてはいるのです、私は

弱い男が話しの的を射ないので、仲埜は一気にここまで喋つたのだが、

「はあ

と、どうも相手の反応がイマイチであることに、少しイラついたのか、フルツと方を震わせて

「じゃあ実践で教えるから

とやや投げやりに言い放ち、すつとその場で立ち上がつた。

仲埜のイラつきを察したのか、弱い男も共に立ち上がつた。

「まず相手が首を攻撃してきた場合、それを防御するために首をまげるわね」

そう言いながら仲埜は首をかくんと横に倒す。

「すると、敵は首の反対側がガラ空きなのを見て、こゝにぞと突いて来るから、これを手で防御するわね」

仲埜は言葉通り手で首を防御する。

「すると、今度は脇が甘くなるので、その際には肘を締めておかなければならぬわね」

確かにその通り、仲埜の脇は締まっている。

「でね、ここでヨシとしちやうのがシロウト、ビシロウトなのであって、実はこの肘つてのは脇腹の半分くらいまでしか防御してないのね。だからここで脇腹の下半分から腰までをカバーするために、膝を曲げて脇腹につけるのね」

仲埜はなんでこんな美容師のような言葉使いをするのかな?と弱い男は余計なことを考えていたのだが、そうとは知らない仲埜の方はかなり必死で実践を続けていて、これはかなり不自然で無理な体勢に見える。なにやらそれこそ前衛舞踏のよつた雰囲気が漂つている。

このポーズを決めるている仲埜は必然的に片足で立つていて、見るからに不安定である。

「師匠、かなり不安定ですが?」

弱い男は思つたままを口にした。

「そんなことはわかつてゐる」

仲埜は気分を害したようだ。

「だから、安定させるためにこいつするのよ」

仲埜はそう言つが早いか、軸にしてたつていた方の膝を崩し、その場で横になつて体を丸めた。

それならばじめから横になつて体を丸めればいいじゃないか?と弱い男は思つた。

「なるほど」

しかし、弱い男はそう言つて、本心を隠した。

師匠である仲埜を傷つけたくなかったのである。

だが、これだけは言つておきたいと思つたことがあつて、弱い男はそれを率直に言葉にした。

「師匠、みつともないですよ」

商店街にも夕方の紅い陽が注いでいて、「漢」の窓からもそれは入り込んでいた。

床で体を丸めているみつともない仲埜と、それを見下ろす弱い男の影が黒々とその紅い光の中に墜ちていった。
沈黙に包まれた静かな夕景であった。

(つづく)

「」という人間を「根が眞面目」というのか、あるいは「カタブツ」というのか、はたまた「口チ口チ」というのか、とにかく弱い男は最終的には無様に寝ころんだだけの仲埜に対し、変な忠義心を起こし、帰宅後も彼に伝授された防御姿勢をひたすら反芻していたのだ。

たしかに仲埜を「師匠」と呼んでしまったことは迂闊だったのかかもしれない。でもさ、ほらよく商人の世界では平社員のことでも「社長」と呼んで持ち上げてみたりするし、女郎屋の呼び込みではいかにも丁稚みたいな小僧に対してだつて「旦那」と呼ばわることもある。安月給のくせに家の中でばかりえばかりくさる亭主を、妻が「お大臣」と呼ぶことだって、まああることなのだから弱い男が変な男を称して「師匠」と呼んだところでそれほど不都合が生じるとは思えないし「え、ハハハ、冗談冗談」ですまされるような話なのである。そもそも、そのときは顔面膨張術で驚かされてテンションが上がつていたから弟子入りしようなんてトチ狂つた考えも起きたのだけれど、その後のみつともない有様を見てその興奮が冷めたのならもう2度と「漢」に近寄らなければ良いだけの事なのだ。

それをこの弱い男は一度これと思いこんだらもう、融通が利かぬ。

帰宅後、いつもの玄関ホールで

「首を倒し逆を手でカバー、このとき脇を絞めておく、そして片足あげて腰を守りひっくり返つて丸くなる」

と、なんだか陰気なことこの上ない念仮の如きを咳き、周囲にホコリを舞い散らせながら自らも舞い散つていた。

しかし、このとき、眞合の悪い事件がふたつ同時に起きていたの

だ。

ひとつは弱い男自身の「ことではれば、」の「すらまつともない武闘？」舞踏？なんでもいいがその「しゃくしゃく」した行為を念仏を唱えながら繰り返していくために、彼自身の心にノリが出てきてしまつたことで、彼はノッてしまつた、ノリノリでくにゃくにゃしているところ非常にポジティヴな男になつてしまつたのであり、もう楽しくて仕方がない。徐々に行行為そのものが高速にスムーズに行われるようになつてきて、汗だくで落ち武者のように髪を振り乱しながら踊り狂つていたら時折脳裏に仲埜のつるつるの頭部と、膨れ上がつてエレベーターの扉を破壊したそれが交互に明滅し始め、「いらっしゃい」という声が繰り返し聞こえてきてそれに呼応する「師匠ありがとう師匠ありがとう」という自分の声も聞こえてきてしまつた。いわゆるトランクス。覚醒である。このとせ、弱い男は真に仲埜の弟子になつたのである。

(つづく)

もうひとつこの事件。それは、弱い男のその有様をジッと見つめる眼、すなわち彼の母の眼があつたことで、彼の念仏を聴き、彼の反復動作と、苦痛から歡喜へそしてついには恍惚へと変容した表情をその眼は見ていたのである。母は羨ましかつた。今、一心不乱に踊り狂う息子が妬ましい。ええい、邪魔をしてやれと彼に近づいたところが、覚醒した息子の勢いは凄まじく、跳ね飛ばされてあわれ床に転がつてしまつた。そうなるともう、いてもたつてもいられないのが母である。すぐさまその場で息子の動作を真似はじめると、生来の身体能力の高さから、すぐに息子と同等のスピードで動けるようになつた。しかし、母の心は覚醒してこない。息子同様汗だくになつてゐるので、スポーツをしているような爽快感はあるのだけれど、息子の表情に現れているような恍惚が芽生えてこない。おかしい。母はムキになつてどんどん動作のスピードを上げていく。ものはや眼にも止まらぬ速度で首を曲げるところから体を丸めるところまでを反復している。完全に息子のスピードを超えてしまつた。

しかし、やはり母は老いていて、ついに限界を超えた。

まず、曲げた瞬間に首が折れた。

しかし肉体は惰性で動き、逆側をカバーしようとした手の力がすでに制御できなくなつていたために、自らの腕力で首をもぎ取つてしまつた。

更に肉体は動き、脇を絞めた途端、肘が脇腹を突き破り胴体にめり込んで、ひょいと挙げた片足の膝が胸に激突して心臓を蹴り抜いてしまつた。

そうして母の肉体は首ナシの操り人形が糸を切られたように、その場に血溜まりを拵えながら崩れ落ちた。無惨である。無様である。

弱い男は母が屍に成り果てたことにさえ気付かず、踊り続けた。

母の血溜まりに足を取られながらも踊り続けた。

生臭い玄関ホールに朝日が射し込んできた頃、ようやく弱い男の

脳が悲鳴をあげ、肉体は動きを止めた。

まったく眠っていないにも関わらず、熟睡し、目覚めたばかりの

ような充足感があった。

そこには初めて、弱い男は母の屍に『付く』。

「暗黒舞踏」

母の声が心に蘇る。

「みつともないよ、母さん」

弱い男はそう呟いて玄関のドアを開けた。

「いつてきます。母さん」

その声は自信に満ちていた。

なんて素晴らしい朝の空氣。

(ア)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5625f/>

弱い男

2010年10月8日15時38分発行